

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	美的文明を論じて偉人の出現を促す : 論説
Author(s)	太田黒, 作次郎
Citation	龍南會雜誌, 108: 7-17
Issue date	1904-11-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5738">http://hdl.handle.net/2298/5738</a>
Right	

り、山林童せすして百姓に餘材あるは聖王の制なりと曰へり。其他彼が孟子の遺志を襲へる所一々枚擧に違わらず。蓋し彼は政治家を以て自ら標榜せんと欲するものに非ず。故に學者として彼は勉めて孟子の右に出でんことを期するものに似たりと雖も。政治家として彼は孟子の下風に立つを以て耻辱と爲さざるものゝ如し。顧ふに政治家として彼の資格が孟子に及ばざるのみならず。政治家としての彼の手腕は到底彼の門人李斯及び韓非に及ばざること遠きなり。

## 美的文明を論じて偉人の出現を促す

大 田 黒 作 次 郎

今の人皆曰く、『文明の世なり、文明の社會なり』と、然れども現時の文明は遂に混沌の文明なるを奈何。

嘗て一盲人あり、夜行くに灯を携ふ。或人之人に告げて曰く、眼明なくして尙且灯の要ありやと、盲者即ち答へて曰く、我が灯を携ふる所以の者は、自らの道を照さんが爲めに非ず、道路の人の我に道を避けむが爲めなりと。聞く者以て理なりとなし、爾後夜行く盲者皆灯を携ふるに至れり。然るに彼

に或夜二人の盲瞽は衝突しぬ。甲者怒りて曰く、咄、灯を携へたる我に衝突す、何ぞ汝の目を使ふことの忽なるやと。乙者すなはち怒りて曰く、我こそは灯を携へたるに汝また何ぞ眼を用ふることの鈍なるやと、兩者強硬相譲らず遂に瞽者の論戦は始まれり。道途の人之を見て惘然に堪へず、兩者の間に解して曰く、卿等の言ふ所兩ながら理あり、然れども氣の毒なる哉、卿等の灯は兩ながら風の爲めに消れてありしを奈何すべしと。不憫も亦茲に至りて極まれりと云ふべし。

憐れむべし、盲者は遂に灯の消れしを知らざりき。彼等は自ら見るの明なくして力を灯に任せたり、されどあゝ哀れなる彼等は、佛を頼むで地獄に落ちぬ。

中古暗黒の時代を遠く後への彼方に遺して歴史は移る幾世紀、世は初秋のそのやう、彼處に野あり、五穀穰々たり。ここに市あり、大廈高樓整然として烟筒高く天半に冲す。壯なる哉、斯くて世は口を極めて文明の光榮を謳歌しぬ。然れども更に見ずや、美はしき野には農夫の畦を爭ふあり、壯麗なる市には商賈の私利を競ふあり、さなきだに各國間には權利擴張の紛擾あり、平民主義、自由主義、帝國主義、社會主義等あらゆる矛盾の主義は起りて對立反目、何時果つべしとも見わざる也。政治家は政治家同志に衝突し、實業家は實業家同志に衝突し、宗教家は宗教家同志、學者は學者同志に衝突し、世はあげて亂調衝突、至る處阿吽叫喊の聲を以て囂しきに至れり。記して茲に至る、吾人は茫として迷ひなき能はざる也。あゝ文明とはそも何ぞや、現今社會の情態の何ぞ彼の盲者の争ひに似たるの甚だしきや。或者は黄金を以て自らの灯となし、或者は權威と爵祿とを以て、又或者は學識を以て各一方の灯となし、得々として夜の闇路を辿りゆきぬ。而も焉んぞ知らん、彼

方よりも亦自己と同じき人類が此方を指して來らんとは。かくして彼等は衝突しぬ。爭闘しぬ。あはれなる者よ、自らに明なくして灯火そも何するものぞや。自ら超絶の力なくして黄金と權威と乃至學識とそも何するものぞや。かくても人はその覺束なき歩みをつゞけて暗黒の巷に彷徨ひぬ。故に曰く現時の文明は混沌の文明なりと。

かつて民權の自由に憧れし人類は今や多くそを得たり、かつて物質自然の運用に盡瘁せし彼等は今や殆んど其目的を達せり。かくて一時に燦爛たる文質文明の光榮に酔ひし彼等は恍惚として已れを忘れぬ。げにや廣大なる宇宙に世界の存することを知りし彼等は却つて自己の存することを忘れたりき。これ云ふまでもなく自個存在の没却なり。人生の第一義は先づ自個存在の意義を認むるに在り、然るに自ら自己を没却して何處に人生の價值ありや、茲に於てか人生は遂に無意義なり、無意義の人生無意義の社會にして奈何ぞそこに光榮と名譽ある文明あらんや。吾人は信ず、眞の文明は人類が先づ自個存在の意義を認識するによりて形作らる。吾れよく天地の一員なることを自覺して、茲に鬱勃乎として生ずる活氣向上の精神となり、發して世界の潮流に馳驅する時、始めてそこに光榮ある文明の花咲かむ。吾人の所謂美的文明とは實に之を指すものなり。

斯かる見地に立てる吾人は彼の所謂科學万能主義を否認す、靈なき文明は遂に死物に外ならざれば也。科學者すなはち説いて曰く、偉なる哉人類の知識や、遂に自然を凌駕せずんば止まざる也と。されど思へ、物質の内心をまで開鑿するの能力ありと誇れる彼等は、自らの墓をだに掘ること能はざるにあらずや。自然を凌駕せりと誇れる彼等は彼等自身の何物たるをも知らざるにあらずや。自

然れは死物にあらず、人生は夢幻にあらず、吾人は科學とプリズムとによりて自然と人生とを見る以外に、更に高尚なる心眼を開きて、そが内面深奥の消息を知らざるべからず。

昔者荒野の子マホメット渺茫千里の沙漠に立ちて、遠くちぎる雲の姿を眺めつゝ、獨り恍然として思に沈みしことありき。落日遠く虞淵に沈みて、夜色蒼茫たる蒼穹の彼方、燦として輝やく星斗を眺めては、彼の黒き瞳は幾度か輝やきけむよ。されば凄風落葉の荒野を吹いて彼の心腸に入りし時、彼が深奥なる心靈は如何に多くを感じけむよ。彼悄然として思へらく『茲にわれは立てり、およそ吾れとはそも何物ぞや、茫漠たる天地のたゞ中に吾はしも子然として立てるなり。生とは何ぞや、死とは何ぞや、將たまた吾は何をか信じ何をか爲すべき』と。果然、人生は彼に對して夢幻にあらず。彼は今此廣漠たる世界に自らの存することを自覺しぬ。かくて彼はそが存在の意義を求めて一人思ひに悩みたりき。されど答へはあらざりし。うち見やる彼方巍然として聳ゆるヘラ、シナイの山々は、手に取る如くに見ゆれども、されど天地は永劫に緘黙の姿を守りて遂に一語も答へざりき。荒野の子彼は茲に於てか靜かに光明の心眼を開かざるべからざりき。かくして彼は自己と人生と自然と神とを見たり。當時世界は混沌として暗かりき、あゝ彼れ遂に立たざるべからざりし也。半月の旗は翻れり、見よそこに爛漫たるサラセン文明の花は咲かざりしか。

眞の文明はかくして生れざるべからず、人はかくして生きざるべからず。徒らに混沌たる無意義の中に東奔西走、以て活動の極致となせるが如き誤謬も亦甚だしきものと云はざるべからず。吾人は重ねて絶叫せむ、先づ活眼を開いて己が姿を認めよ。吾は吾なり、世は事實なり、嗚呼吾はそも如

何に進むべき乎、如何に爲すべき乎。此問題にして釋然たらんか、活躍と奮闘と始めて意義あり光明あり。人生の價值茲に於てか定まり、文明また其眞意義に達す。徒らに物質の色を求めて自己の姿を失するが如きは吾人之を何とか云はんや。

閑話休題吾人は茲に偉人の二字を説かざるべからず、蓋し文明は偉人を得て更に一層の光彩を放つ、否寧ろ偉人その者が大なる文明の開拓者なればなり。

偉人とは何ぞや、これ極めて趣味深き問題にあらずや、されど答へは極めて簡單なり、曰く、『彼は一切凡俗に超絶せる者なり』と。請ふ吾人をして少しく信する所を述べしめよ。

有史以來あらゆる世界の出來事は皆其裏面に一大魁物を有す、魁物とは何ぞや、これ吾人の所謂偉人なり。此を以て歴史は畢竟偉人の傳記に外ならずとはカーライルを待ちて始めて唱へらるゝ言ならんや。宗教改革はマルチンルッテルの歴史なりき。佛蘭西革命は又ヴオルテールとモンテスキエとルソーとの片影なりき。然り、吾人は世界の大事件を見るに當りて必ずやそが根柢の主導者たる人物を見ざるべからず、畢竟時代の光榮を讚美するは偉人の事蹟を讚美するに外ならざれば也。希臘文明の黄金時代はペリクレスの歴史に過ぎざりき。羅馬文明の榮冠は正にオウガスタスの頭上を飾るに過ぎざりき。あゝ偉人、英雄、世は彼等を待ちて始めて光榮の異彩を放つ。彼等は云ふまでもなく世界の花なり、人生の一大光明也。げにや一切の事物に超絶せる彼等は常に崇高なる心眼を開いて、時代と人と宇宙と人生とを見たり。かくて彼等はよく動きよく爲しぬ。彼等の動作はしかく自然に發して自然に行はれたり。而もこれ自然の大なるが如くに大なりき。自然の美なるが如

## 論

## 説

くに美はしかりき。何となれば、彼等既に一切の凡俗を超絶して直に宇宙の大精神に接す、無限寂寞の中に聞き得たる天地の聲は到底力なき人間のそれに比すべきものにあらざれば也。混沌たる人生の奥底深く潜在せる大秘密をば、彼等は明かに了得して、茲にあらゆる小さきもの、愚かなるもの、暗きものの上に立ちて行動しぬ。彼等は既に天の使命の何たるかを自覺したればなり。かくしてアレキサンダーは生れぬ。ダンテは生れぬ。ルツテルは生れぬ。ルーソー、クロムウェル、ワシントン、ナポレオンは生れぬ。彼等はいさより種々の事業をなしたりき。彼等の或者は軍人なりき。彼等の或者は僧侶なりき。彼等の或者は革命家はた詩人なりき。されども其根莖に存する大精神に至りては一なりき。彼等は等しく Seeing eye の thinking thought を有したりき。此活眼と大思想とを有せる彼等は亦蚪龍天馬の大動力を有したりき。かくして彼等は自己と人生と時代と人々を見たり。而じて蚪龍天馬の大活力を時代の頭上に注ぎぬ。宜なるかなそが行蹟の燦爛として歴史の十ツを飾りしことや。炯として輝やく眼光は常に永遠の理想に向つて馳せたりき、かくて彼等は廣大なる天地を通して活躍の新生命を得たりし也。

あゝ區々たる小知識小眼光果して何するものぞや、野を見山を見溪谷を見るもの誰か世界の圓きを知らむや、岩を見波を見泡沫を見るもの誰か大洋の平らかなるを知らむや。吾人をして目睫以上を見せしめよ、吾人をして現實以上を觀せしめよ。然り、吾人は凹凸極まりなき世界のそが大體に於て圓き平面球<sup>スフェヤ</sup>なることを見ざるべからず。吾人は怒濤澎湃たる大洋もそが大體に於て常に平らかなる鏡面なることを知らざるべからず。吾人は人類を徹して直ちに自然の生命を見ざるべからず。吾

人は喧沛の中に寂寞の聲を聞かざるべからず。蓋し怒濤澎湃たる海洋の底も常に冷靜なる潮流を以て満てるごとく、喧沛たる世界の深底にはまた必ず無限寂寞の世界あればなり。此世界を感得して茲に寂寞の大精神あり、これやがて發して大行動となる所謂位置のエネルギーなりと知らずや。クロムウェルは其始め正直平和なる民黨の一員に過ぎざりき。世はその始めに於て彼が斯の如き大行動をなし得んとは夢にも知らざりし所なり。されど彼は此間に於て靜かに活眼を開いて人類と神とを見たり。一たび宇宙の大精神に接せし彼は忽焉として自己の使命を了得したりき。果然大動亂は英國の天地を蔽ひぬ。あゝ彼れ遂に起たざるべからざりき。寂寞は遂に永劫に寂寞ならざりし也。偉人の行動畢竟斯の如きのみ。

ルッテルも亦然りき。彼が其青春時代に於て、法律政治の研究を捨てゝ僧侶たらんと決心せし時、彼がたましひは如何に正直に如何にをとなしかりけむよ。もとより彼は宗教改革など夢にも見ず、只専心に神の僕たらむことをのみ勉めたるなりき。されど敏活なる彼の精神と燃ゆるが如き感情とはいつまでも眠りてのみあらざりき。天の使命と宇宙の精神とを感得したる彼は、一度羅馬を見舞ひて殆んど驚愕に仆れんとせり。あゝ寂寞は遂に永劫に寂寞なるべからず。彼は立てり。立ちて自己の使命を果しぬ。これルッテルが爲しゝにあらずして實に宇宙の大精神がなしし也。ダンテは其始め眇たるフロレンスの一市民に過ぎざりき。彼が青年時代に於て、燃ゆるが如き愛國心にかられて専心一意フロレンスの繁榮をはかりしが如き、其心情の如何に美はしくすなはなるよ。されど自然は彼をして終身一フロレンスに跼蹐するを敢てせしめざりき。フロレンスの市民は擧つ



て彼を虐待せり。彼れ遂に去らざるべからざりき。あはれ燃ゆるが如き青春の血汐の「たびビヤト」の戀を失ひ、再び故郷フロレンスの愛を失ひて如何でか靜止するを得むや。人界の紛々擾々として亂調極まりなきを觀せし彼は愁然として悲しみぬ。斯くて彼は熱心なる『平和』の追求者となりしなり。其後彼は專心一意學術研究に身を委ね、希臘羅馬の古文學は云はずもあれ、プラトーンの哲學に、天文學に神學に、あらゆる書籍を讀み破りて漸やく深遠該博なる知識を畜へたり。されど平和は依然として來らざりき。煩悶苦惱の人生はいたづらに波風多くして、平和の樂園は遂に來るべくもあらず。彼は颯然としてゆくへも知らぬ漂流の子となりぬ。自然は彼を憐れみしか知らず、忽ちにして天の靈光は彼の心眼を徹して輝やきぬ。見よ、多年苦惱の人生にもだれし結果、喜劇デイヴィナ・コメディア「Divina comedia」は成れり。

大なる哉彼や。錯雜多端の人生はあらゆる苦痛を彼の身邊にあびせかけぬ。されども彼は仆れざりき。奮闘と向上とは彼の生命なりければ也。げに彼は宇宙と人生と神とを見るの大精神を有したりき。一篇の『神曲』これ悉く偉大なる思想の發現にあらずや。紛々として極まりなき世界の末遠く彼は遙かに Silent の世界を見たり。かくして彼は疾呼一番桃李の彼岸に向つて急ぎぬ。果然!!! 求めし彼は遂に與へられたりき。

吾人は最早偉人の生涯を語らざるべし。されど只一言せむ。彼等は常に目睫以上を見るの人なりき。彼等は常に現實以上を觀するの人なりき。廣大なる天地の秘密は釋然として彼等の前に擴げられぬ。彼等は進んでそを握りしなり。詩に曰く『鳶飛んで天に戻り魚淵に躍る』と、あゝそれ天地に明かなる

を云へるにあらずや。彼等はよく鳶の飛ぶを見たりき。魚の躍るを見たりき。而して天地の明らなるを見たりき。廣大なる宇宙自然の大精神を感得せし彼等は、各其秘密を擧げて人界に臨みぬ。人類は時代によりて或者を要求しぬ。彼等は直ちにその一を與へたり。斯の如くにして偉人が人類の眼に映ずる所、或は預言者となり、僧侶となり、軍人となり、政治家となり、乃至詩人哲學者となる。而も其根本に於て同一なること實に以上に述べたる如し。彼等は只偉大なる精神を有せしのみ。あゝたゞそれのみ。

讀者よ、吾人をして再び本文の論旨に歸らしめよ。春は明けぬ、二十世紀の曙光は幾多の新らしき匂ひを以て吾人の世界を見舞ひぬ。されどそが開展の序幕は遂に失望の歴史なりき。げにや物質燦然たり、世は恍然として文明の榮光に酔ひぬ。それよ遙かに降を放てば海に數万の大船は駛行し、陸に烟突の林を見る。盛んなる哉、會堂、寺院、大學、議事堂、整然として至る處國民繁盛の瑞氣漲ぎる。これ云ふまでもなく二十世紀文明の異彩たるなり。されど如何せん、外形と内容とは等しき色に輝やかざるを如何せん。形と質とに具はりて内心の空漠を感ずるは現時文明の欠陥なるを如何にせん。然り、世は機械の運轉にあらざれば自ら動くこと能はずなりぬ。人は機械の運轉にあらざれば自ら歩むこと能はずなりぬ。吾人自らも一の機械となり了せしにあらざる乎。蒸汽と電氣とを有せる彼等は自動の活力を有せずなりぬ。電燈と瓦斯燈とを有せる彼等は自己心底に赫耀たる無盡の燈火を有せずなりぬ。肉と質とは今や世界の最要素としてそれ以外に何物もなくなりぬ。あらゆる自然の美と壯大と無限の生命とは彼等に取りて何の關する所もなき也、彼等は只如何にして此

を利用するかを考察するのみ。一朵の野花を見てソロモンの榮華よりも大なりと感ずる大思想は金や香として求むべからず。かくても尙世は文明を謳歌せざるべからざる乎。咄、陋劣なる形骸の慾求に齷齪する外眞の美光を解せずしていつくに美はしき文明ありや。

悲しい哉、吾人は不幸にして謳歌さるべき文明を見出す能はずして却つて呪はるべき文明を見出しぬ。嗚呼美的文明の曙光は遂に此世を見舞はざる乎。吾人屢々聞けり、人は半ば神に等しと、之ある哉、万物の靈長たることを自覺せる人類は何故に區々たる物質的形骸に齷齪することを止めて、高く飛躍する活氣と向上との精神を養はざる乎。よく機械を動かすことを得る人類は何故に自ら動くこと能はざる乎。語を寄す人々よ、世は機械にあらず、人は機械にあらず、請ふ自ら動け、自個存在の意義と人生の眞價とは躍如として其裡に現はれむ。更に語を寄す、人は半ば神に等しと、之ある哉。希くば地上の文明をして天上にまでも輝やかしめよ。

讀者よ、吾人は不完全ながらも云はん。欲する所を云へり。吾人は今や結論に向つて論議の歩調を速めざるべからず。叙し去り叙し來りて茲に本篇の大意を思ふ、論旨は極めて簡單なり、曰く『形骸に泥みて心靈の活動なき文明は無意義の文明なり。吾人はあくまでも天地に飛躍する活氣向上の精神を以て、美的新文明を形作らざるべからず』と、たゞ斯の如さのみ。若しそれ偉人の出現に至りては吾人之を當今の時勢に望むや切なり。彼等は實に混沌たる時代の指導者たれば也。見ずや穀觶たる旅の子が一たび幽暗の山路にゆきくれて、徨々乎として迷へる時、一輪の明月高く彼方の峯をはなれて靜かに下界の闇を照らす、あゝ何等の偉觀ぞや。吾人が憧憬して止まざるはげに此偉觀の

み矣。あゝげに此偉觀のみ矣。

(完)

(明治三十七年十月三十日稿)

講

わが牢獄觀(承前)

高田保馬

『八』

あゝ世を擧げて私利と功名とを知るのみ。眞愛の影遠くひそみにひそみぬ。それよ、たゞ北溟の天高く渡りきて森の梢にわたづるゝ秋風、夜は更けたり落葉の雨の音、遙に銀鈎の影漂はし來りて渚に洄ぶ波の響、願はくばわが聲に和して貧者が運命に泣かずや。呪咀すべきは現代の文明よ、社會を強者の專有に歸せしめゑ僞文明よ、問はむ、日々に汝が發布しつゝある幾多の宣告文の意義は何ぞ。曰く、重禁錮幾月、監視幾年、罰金幾何と。願はくば、其斷乎的確の理由をきくを得むか。

貴賤上下共に財用窮すれば萬事差支ありて損することおはしおのゆるに學者よろしく經濟をよくするを先とすべし生計足らざれば利をむさばりて仁義禮智信の心を失ふ(良齊閑話)

窮して濫せざるものは聖也。小人窮すればこゝに濫すとは、人體を構造せる元素の組織にして變更